

# 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名：渡辺一生	提出日：平成 23 年 1 月 24 日
東南アジア研究所における職名：研究員（グローバル COE） * 右記の該当する職位に○をつけて下さい。（講師・助教・助手・ <u>ポスドク</u> ・博士課程学生・修士課程学生・学部学生）	
派遣先の研究機関等（調査を実施した国名・機関名及びカウンターパートの研究者名）： インドネシア・リアウ大学 * 派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所○をつけてください。（ <u>大学</u> ・研究機関・企業・その他）	
派遣期間：平成 22 年 10 月 3 日～平成 22 年 11 月 23 日、平成 22 年 12 月 2 日～平成 22 年 12 月 30 日（派遣日数：81 日）	
研究活動等の主な内容（該当する番号に○をつけてください。複数可） ①研究・実験、② <u>フィールドワーク</u> 、③ <u>セミナー</u> 、④インターンシップ、⑤サマースクール等の講習、⑥学会出席、⑦単位取得等、⑧その他	
研究活動の主な領域（該当する番号に1つ○をつけて下さい。） ①人文学、②社会科学、③数物系科学、④化学、⑤工学、⑥生物学、⑦ <u>農学</u> 、⑧医歯薬学、⑨総合領域、⑩複合新領域	
派遣の概要（500～700 字程度） インドネシア・リアウ大学と共同で、リアウ・バイオスフィアリザーブの保全管理に関するフィールドワーク及びセミナーを実施した。今回のフィールドワークの目的はこの地域のバイオマス循環のモニタリング及びモデリングに必要な基礎パラメータの習得であった。 フィールドワークでは、まず、調査対象地域に位置する農村（リアウ州・ブンカリス県・ブキットバトゥー・タンジュンラバン村）の屋敷地内に分布する樹木の種類や樹高、胸高直径など、バイオマスの推定に必要な基礎情報を測定した。加えて、農家が所有・経営するゴム園やオイルパーム園についても、同様な測定を実施した。 また、リモートセンシングによって広域的なモニタリングを実施するため、雲などを透過するマイクロ波リモートセンシング技術の適用可能性について検証を試みた。この検証のために、GPS を用いて広域の土地利用状況を把握し、解析結果と照合する作業を行った。 また、10 月 20 日にはリアウ大学で、12 月 5 日にはタンジュンラバン村でリアウ・バイオスフィアリザーブに広がる泥炭地の利用と保全に関するセミナーを開き、研究者のみならず企業や村人も交えた意見交換を実施した。	
事業に係る研究成果（500～700 字程度） 長期間フィールドに滞在できたことで、様々な測定が実施できた。測定できた木は、約 30 樹種、3000 本以上ののぼり、この地域のバイオマス推定を行うのに十分な数の測定ができた。また、リモートセンシングには広域な調査が必要となるが、今回は数万ヘクタールの土地を時間をかけて観察することができたため、精度の高い土地被覆分類画像が作成できた。加えて、現地の人々と接する内に、少しずつではあるが言葉も理解できるようになったのも自分にとって重要な財産となった。 今回の調査地は初めて入る場所だったが、次第に村人とも打ち解けることができ相手も調査の目的を理解する時間も十分にあったため、比較的スムーズに現地調査ができた。特に、村長をはじめ、泥炭地での農業や林業の課題についてはある程度認識しているので、村でセミナーを開けたことは互いの認識を共有するのに非常に役立った。 このように、今回のフィールドワークでは、現地の人々と共同で地域資源の保全のあり方を考える為の大きな一歩になった。今後も、「地域共同」プログラムを活かし、リアウ・バイオスフィアリザーブの保全管理に積極的に関わっていききたい。	